

巻頭言 - 特別記念号の刊行にあたって

著者	花登 正宏
雑誌名	集刊東洋学
巻	100
ページ	1-2
発行年	2008-11-22
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132647

特別記念号の刊行にあたって

中国文史哲研究会会長 花 登 正 宏

『集刊東洋学』は東北大学文学部に事務所を置く中国文史哲研究会の機関誌として、昭和三十四年五月二十五日に第一号が刊行された。爾来五十年間、毎年二号を刊行し、このたび目出度くその第百号特別記念号を刊行する運びとなった。

中国文史哲研究会創設の経緯は、私が関係資料より知り得たこと及び創刊に関わられた先輩諸先生よりお聞きしたところを総合すると、次のようなものであった。当時は若手研究者の研究成果を発表する機会が少なく、会結成の機運は自分たちの論考を掲載する雑誌の創設を希求する東北大学の助手・大学院学生の間よりまず興り、ついで当時東北大学文学部に在職されていた愛宕松男、内田道夫、金谷治、佐藤圭四郎の諸先生がそれに賛同、さらに東北地区の大学等に在職される諸先生のご支援も得て、昭和三十四年二月十七日に結成された。結成当初の名称は東北文史哲研究会であったようである。会則の目的に「文学・史学及び哲学の三者連合による中国を中心とした東洋諸国にかかわる総合的な学術誌『集刊東洋学』をつくり斯学の発展のためにつくす」とある。ここより本研究会が機関誌『集刊東洋学』の刊行を唯一の任務として結成されたことが看取される。なお、事務所は東北大学文学部中国学研究室に置くものの、会員は東北大学関係者に限らないことは設立当初も現在と変わるところはない。

第一号「編集を終えて」欄に「必要な経費をどうするかという大きな問題が我々の前に残されることになった」とあるように、当時の関係者にとつての最大の問題は、雑誌を新たに刊行しようとするとき常に起こる刊行経費の問題であったが、早くも第三号（昭和三十五年五月）の同欄には「集刊東洋学も創刊号発行以来二年目を迎えた。いろいろな困難や失敗があつた。費用の問題、編集上の問題について。が、ここに第三号が刊行され、年二回刊行の恒常的見通しもついた」と

あり、経済的問題が基本的に解決を見たほか、年二回刊行するという現行の方式がここに定まったことになる。以来約半世紀の間、世情の変化による諸式の高騰により、刊行の維持が危ぶまれ、やむなく会費の変更をお願いしなければならぬことも幾度あったが、その都度、会員諸氏のご理解により危機を乗り越えることが出来、この度の特別記念号の刊行を迎えることが出来ることとなった。会を代表してあらためて会員諸氏にお礼を申し上げる。

『集刊東洋学』は、中国の哲学、史学そして文学を統合する学術誌である。関係者の中には、その創刊は四、五年前に京都大学文学部に本拠を置く中国文学会より刊行されはじめた『中国文学報』に触発されたところがあると言う方もいるが、一方は中国の文学語学の専門誌、他方は中国の哲史文をまたぐ専門誌という点に大きな違いがある。東北大学にはすでに昭和三年に、当時法文学部に在任の武内義雄、岡崎文夫、そして青木正児の三人の先生方を中心として、「支那学に関する討究をなし、併せて会員相互の親睦をはかるを以て目的とす」る支那学会が設立されており、中国の哲学、史学、文学を一体のものとして考究しようとするのは、この支那学会の理念を継承するものであり、ここに本研究会、そしてその機関誌である『集刊東洋学』の大きな特色がある。学問の過度な細分化に対する反省から、学問の学際化・融合化が叫ばれる今日であるが、『集刊東洋学』はすでに半世紀以前に地域学という現在喧伝される理念を具現しており、今日では全国有数の中国学の専門誌として学界に大きな地歩を占めるに至っている。

五十年前と比較すると、情報科学のめざましい発達にともない、研究に関わる情報伝達の様子は以前とは比較にならないほど高速化し、研究資料の蒐集も容易となり、また研究機関同士また個人レベルでの外国との学術交流、共同研究も盛んに行われるようになった。このような研究環境の大きな変化は中国学分野の研究の進展に良好な影響を与えていることは言うまでもないが、研究そのものは研究者個人の地道な研鑽に俟つことが多い。中国文史哲研究会そしてその機関誌『集刊東洋学』は、学術雑誌としての高い質を維持することを心がけ、従前同様、研究者各位の研究成果を公刊することにより、斯学の発展のために尽力していく所存である。会員諸氏には、これまでと変わらぬご支援・ご協力を賜りたく、心よりお願い申し上げます。

平成二十年九月九日